



研究調査報告

東アジアの租界とメディア空間

旧台北城の近代建築の見学調査

金 容範

(非文字資料研究センター研究員)

2012年8月6日より9日まで、台湾における建築の見学調査を行う機会を得た。この見学調査は、19世紀後半から20世紀前半にかけて、韓国、台湾、満州など、東アジアに広げられた植民地建築の研究の一環として、今回は、台湾の近代建築の発祥地でもある、1884年に築城された旧台北城を中心とした植民地建築の基礎状況を把握するために実施した。調査参加者は、本学工学部建築学科教授内田青蔵、内田教授研究室の博士後期課程木下和也と私である。4日間という短期間の調査であったが、同研究室の台湾人留学生の案内で、密度ある見学調査が行われた。

台北における近代建築のほとんどは、20世紀前半に台湾総督府が公布した「市区改正事業計画」(1900)と「大台北都市計画」(1932)に沿って建てられた、日本統治時代の主要の公共施設と日本人の官舎である。これらの建築群は、現在、旧台北城のほぼ真ん中に位置する台湾総統府庁舎(旧台湾総督府庁舎)に面した「重慶路」を中心に散在しており(図1)、旧台北城に囲まれた「中



図1 「台北市区計画・街路並公園図」(1932)に表れた1930年代の旧台北城と城内外の建築群。今見学調査では、台湾総督府(1919・①)、台湾総督府民政部殖産局付属博物館(1912・②)、日本勸業銀行台北支店(1933・③)、総督官邸(1901・④)、台湾州庁々舎(1912・⑤)、台北市公会堂(1936・⑥)などを訪問した。

正区」は、まるで歴史保存地区のような姿をしている。これらの建築物は、元の姿を保存したものの、新しい機能を持った建物として再生されているものが多い。すなわち、台北における近代建築は、日本統治時代の歴史を如実に示しているながらも、現今の台北の都市建築として今でも生きているのである。今回の見学調査で、これらの建築物のうち、最も強い印象に残った事例として「土銀展示館」(旧日本勸業銀行台北支店)を紹介しておきたい。

「土銀展示館」は、2007年に台湾国立博物館と台湾土地銀行が共同で旧日本勸業銀行の建物を国立博物館付属の展示空間として復旧・再生させたものである。現在は、2階に吹き抜いているかつての営業室は、その天井の高さを活かしてランプを設置し、大空間の展示スペースに変え、自然史をテーマとした子供の自然教育の場として活用されている(写真1, 2)。さらに、2階の文書保管室は、日本勸業銀行時代に保管された土地台帳や関連書籍、写真などを展示する「土銀銀行行史室」に変え、また、地下には、金庫の内部を一般に公開している。なによりも目を引いたのは、建物の外観は勿論、内部の柱と天井のシーリング、壁面のタイル、設備などを昔の姿に戻しており、その一部は、現在の展示空間と融和され、観覧できるように細心の注意を払っているのである。

今回の台湾の見学調査は、日本統治時代に建てられた植民地建築を自身の近代建築として積極的に受容しながら新たに再生している台北市の近代建築の現況が確認でき、非常に有益な時間であった。

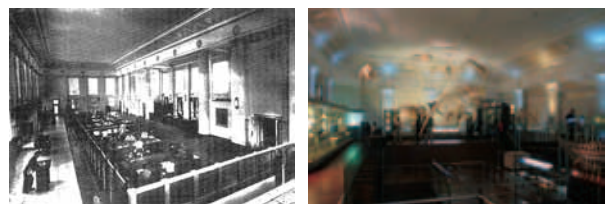


写真1, 2 建設当初の日本勸業銀行台北支店の営業室の内部(出展:『台湾建築会誌』、1933)と自然史博物館の展示スペースに変わった現在の姿(筆者撮影)